現代の中間階級

田沼　肇編

大月書店

目　次

序　章　「中間階級」論の展開……田沼　肇…五
一「中間階級」論の背景――二「中間階級」論の系譜――
三「中間階級」論の内容――四「中間階級」論の課題

第一章　「中間階級」の地位
中間階級論……ロベール・ドリーユ…二五
手工業者と小商人――手工業――手工業の特徴はなにか？――この社会層の目前の見通しはどういうものか？――小商業――小売商業で小企業が優越的な役割を保持していることはフランスに特有のいくつかの歴史的条件によって説明される――小商人はどのような経済関係の中にからみこまれているか？――この社会層の現状はどうか？――小企業はどうなるか？
新「中間階級」……ロベール・ドリーユ…五八
技師と幹部職員――技師の社会層の発展――技師グループの性格と範囲――技手と職長――幹部職員――技師および幹部職員の現状――国家機関にむすびついた中間層――本来の国家機関――「独立」の知識人――中間階級の「独立」の終末――「中間階級」の状態と将来

第二章　「中間階級」各層の問題
公務員の状態……マリュス・ベルトゥー…九三

公務員の購買力と労働条件との推移——官職の構成の推移
現在の技師と幹部職員……R・ウエー P・レヴィ…二三〇
給料生活者……ウジェーヌ・デュムーラン…二三四
一　給料生活者はどれだけいるか——二　給料生活者の給与——三　彼らはどの階級に所属しているか——四　給料生活者の窮乏化
給料生活者の階級的所属……ウジェーヌ・デュムーラン…二五九
デュメーヌとボーの手紙——若干の予備的評語——R・フォサエールの見解——最初の結論——生産的労働と非生産的労働
西ドイツの中間層・小売商業の状態……エリザベート・ベルンハイヤー…二八六
月額所得二〇〇マルク——百貨店コンツェルンの圧倒的な競争——商業利幅は減少——利子の引上げ——もっぱら独占体のための減税

第三章　「中間階級論」批判

企業と給料取り……ヴェラ・シェラークマン…二九三
事務労働者の地位とイデオロギー……ヴェラ・シェラークマン…三三八
一　ホワイト・カラーの態度——二　事務所の革命——三　大不況—幻滅
四　職争とホワイト・カラーの生活条件
「中間階級」の神話と資本主義の現実……ヴェ・エス・セメノフ…三六三

序章　「中間階級」論の展開

田沼肇

一　「中間階級」論の背景

現代における「中間階級」の歴史は、いうまでもなく、資本主義の発展と密接な関連をもっている。とりわけ、資本主義が独占段階へ移行し、その寄生性と腐朽性とが強まるのにともない、「新中間階級」の社会的比重が量的にいっそう増大しただけでなく、この「階級」にぞくする人々の労働と生活とが、一般的にいって不安定となり、しかも不健全な性質を帯びてきた事実は、もはや疑う余地のない傾向となった。

資本主義的発展の初期においては、わが国の「新中間階級」の社会的基盤も、士族サラリーマンという表現が示しているように、主として没落士族であり、主観的には、封建制のもとでの身分意識をかなり強くもちつづけていた。しかし、物質的な条件からみれば、すでにかれらの大半は、薄給をほとんど唯一の生産源泉とすることを余儀なくされていたのである。

一八九〇年代後半（明治三〇年前後）は、わが国の士族サラリーマンが、近代的なサラリーマンへ成長する過渡期にあたっている。日本資本主義のめざましい発展は、とくに大学卒業のサラリーマンに、立身出世の現実的可能性を保障し、かつ一般的にサラリーマンの増大と、その内部における階層分化を急速におしすすめた（女子事務員もこのころから登場）。かれらの社会的基盤も、没落士族から、小地主、小商人、小工業者などの「旧中間階級」へ変った。これは主として、資本主義の発展と、その独占段階への移行の過程で、「旧中間階級」が没落した直接の結果であった。下層サラリーマンの窮乏化は、日露戦争後の社会主義運動の発展とむすびつき、かれらのあいだにも、一部に自然発生的な運動がみられるようになった。

第一次世界戦争中の好景気は、サラリーマン層の生活を一時的にうるおし、「成金熱」をかきたてた。しかし、それも束の間の夢に終り、戦争末期から戦後へかけて、生活必需品の価格がいちじるしく騰貴し、大多数のサラリーマンの生活は急激に悪化した。それまで、洋服を着た人種として、庶民のあいだでは別格に扱われていたサラリーマンも、まさに「洋服細民」とよばれるにふさわしい状態になってきたのである。そして、米騒動と、それにつづく工場労働者のストライキ運動の高揚に刺激され、一九一八年（大正七年）ごろから、かなり広範囲のサラリーマンが「増俸運動」を展開し、一九一九年（大正八年）には、まだ相互扶助的な共済組合の域を出なかったとはいえ、わが国で最初のサラリーメン・ユニオンが結成された。

こうして、日本のサラリーマンの現代史は幕をひらく。それは、「サラリーマン恐怖時代」と名づけられた一九二〇年代後半以後の大不況を経過し、第二次世界戦争とその敗戦、ならびに激しかった戦後インフレーションの過程をとおして、サラリーマン層全体がいっそうの没落を余儀なくされた歴

史である。このサラリーマン現代史の開幕期に、わが国における「中間階級」論の最初の展開がはじまったことは、けっして偶然ではない。

長かった戦時中の空白期間を経て、わが国における「中間階級」論の再流行は、とくに第二次世界戦争後、ごくさいきんの時期に認められ、よく知られているように、それはなお継続中である。

まず、ドッジ・プランの強行、労働運動の弾圧、朝鮮戦争、泡沫のような「特需」ブーム、そして不況とつづいた時期に、ぬるま湯のような生活感情を夢想させるサラリーマン小説の流行をみたが、一九五五年前後からは、好況に転じた経済情勢を背景にして、「ハウ・トゥ（How to）もの」とよばれる一連の「実用的」な新刊書が、店頭をにぎわしている。せめて一生下積みで終らないためには、いったいどうすればよいのだろうかという、サラリーマンならだれにも共鳴できる気持を利用し、こうすればあなたは成功する、出世できる、上役の気にいるなどのキャッチ・フレーズで、それは売りだされている。もちろん、第二次世界戦争前にも、サラリーマンを対象にして「立身出世読本」の類が、数多く出版されてはいた。しかし、さいきんサラリーマンによびかけている「ハウ・トゥもの」には、アメリカの出版物からの翻訳が多い。

そして一方、中堅層以上のサラリーマンには、「マネー・ビル」への勧誘である。また娯楽も、中堅層はマージャンを、さらに上層はゴルフを、というぐあいに分化しながら、たとえそれが「交際」や「営業」の手段ではあっても、とにかく豪遊ならぬ、「細遊」ならだれにでも楽しめるようになってきた。

たしかに、わが国サラリーマン層の生活には、安定化のきざしがみえてきた。敗戦直後、窮乏のど

ん底につきおとされたサラリーマンが、工場労働者といっしょに労働組合運動へ積極的に参加した当時とくらべると、その意識水準にも後退が認められるかのようである。そのうえ、とくに大企業では、「プロ野球にたとえれば一〇年選手」などと称される中堅社員＝企業内中間層の育成を系統的におこない。一般に企業意識をよびおこすための努力が、しつようにくりかえされている。だからこそ、東京丸の内のオフィス・センターに勤務している若い会社員のなかには、政治についての意見を大河内一男氏に質問されて、「会社の事業と、政策との関連性から、政党というものを考えますね。……われわれにとって、売春禁止法のようなものにたいする感覚よりも、財政投融資の増額といった方に関心がある」と平然と答え、「財政投融資でどれだけの産業設備を補助するのだということになると、そのために会社が徐々に発展し、自分のボーナスなり給料なりに影響してくる。そうなってくると、功利的かもしれませんが、自分の生活も間接的にはうまくゆく」と、大真面目に考えている人も少なくないようである（『エコノミスト』一九五八年新年倍大号、座談会「丸ノ内のサラリーマン」）。

一般に、事務労働への新しい労務管理方式の導入と相まって、サラリーマンの生産労働者にたいする優越感を強め、労働組合運動への参加を消極的にさせる方策が、資本によって積極的に採用されている事実は無視できない。とくに「神武景気」以後、一部サラリーマン層のあいだに浸透しつつある当面の生活の安定感へのもたれかかりと、せまい小市民的な私生活への逃避によって、精神的安住をはかる傾向は、それが近視眼的な生活態度であるという批判はできても、事実上いちがいに軽視するわけにいかないのである。こうした背景のもとで、いわゆる人民資本主義についての主張や、「大衆社会」が形成されたとする見解などをめぐり、「新中間階級」ないしホワイト・カラーの性格が、わが国ジャーナリズムにおいても、大いに論じられている。

以上のべたように、「中間階級」論は、なにもさいきんになって忽然と登場したわけのものではない。第一次世界戦争以後、インフレーション、恐慌、ファシズムの台頭など、資本主義社会特有の社会的変動との関連で、ひろく国際的にとりあげられてきた論争テーマなのである。そして多くの場合、マルクス主義を否定し、あるいはこれを修正しようとする試みに関連して、くりかえし提起されるのであった。

二　「中間階級」論の系譜

すでに、一九世紀の末葉、エンゲルスの死後まもなく、ドイツ社会民主党内において、マルクス主義を修正しようとする動きと結びついて、「新中間階級」問題をめぐる論争が展開された。修正派は、「旧中間階級」に代り、「新中間階級」が発生したとして、ブルジョアジーとプロレタリアートとの対立が尖鋭化するという「公式」を批判したのである。当時、マルクス主義の理論家として高名であったカウツキーは、一八九五年に「インテリゲンチャと社会民主党」と題する論文を発表し、新しい中間層の増大を認めつつ、それとプロレタリアートとの関係を論じ、原則的な立場から問題を解明して、修正派の主張に反駁を加えた。さらに一八九九年には、修正派の理論的指導者たるベルンシュタインにたいして、『ベルンシュタインと社会民主党の綱領』と題する著書を発表し、そのなかに「新中間階級」という一節を設けて再論した。この論争が、いわゆるベルンシュタイン=カウツキー論争であるが、かつて一九三五年（昭和一〇年）に、向坂逸郎氏は、「しばしば《新中産階級》の問題については、マルクシストの怠慢が非難されるが、実は、この問題が問題化したとき、すでに根本的な点につ

いては確定的意見が出来上っていたのであった」として、カウツキーの主張を支持している。

ドイツでは、ベルンシュタインにつづき、レーデラー『近代経済発展における私的俸給生活者』（一九一二年）などに修正派の主張が展開されたが、わが国においては、修正派というよりも、たとえば北岡寿逸氏のような立場の人が、一九三三年（昭和八年）に、つぎのように書いている。「マルクスは社会は少数の大資本家と多数の無産階級とに分離すると言った。多数の中小の地主、中小工業者が依然存続することに依って、彼の予定は既に其の価値を没したが、彼は多数の而も有力なる新中産階級の発達を見逃したことに於て更に大きな過誤を犯した」と（社会立法協会『給料生活者問題』）。そして、「給料生活者の階級としての存在は積極的に階級として活動をなすよりも、消極的に社会を有産階級と無産階級とに分つことを防止するにある」（前掲書）と主張する。これは、かつて日本サラリーメン・ユニオン（S・M・U）が日本労働総同盟へ加盟し、わが国の歴史上はじめて、サラリーマンが工場労働者とともに組織的運動をすすめるにいたった一九二五年（大正一四年）に、時を同じくして発表された東京府「中等階級生計費調査」報告書の内容と軌を一にした思想で貫かれている。その報告書は、つぎのように支配階級の立場を説いているのであった。――「若しこれらの中等階級にして次第にその勢力を失ひ、社会の大勢にして顕然と上下の二階級に分れんか、極端なる労働者専制社会の現出も夢想し得ざるに非らず。されば現時の中等階級の存在は穏健なる社会発達のため重大なる意義を有す。而して、旧中等階級の減少に伴ひて、日々に増加しつつある新中等階級、即ち有識無識の精神的・技術的労働者、換言すれば俸給生活者階級、此等階級の擁護は、現時特に緊急の問題なりとす」と。

しかし、第二次世界戦争前のわが国では、「中間階級」論争のヘゲモニーを、全体としてマルクス主義擁護の立場がにぎっていたところに、一つの特徴がある。すでに一九二三年（大正一二年）には、

大内兵衛氏が、大原社会問題研究所パンフレットの一つとして、「俸給生活者の没落とその運動」と題する論文を書いた（これは、一九四七年刊行『サラリーマンの運命』に再録されている）。つづいて、一九二〇年代後半の大不況前後に数多く出版された「中間階級」問題の文献中、サラリーメン・ユニオンの指導者の一人であった小池四郎氏の著書『俸給生活者論』（一九二九年）、また前田一氏の三部作（一九二八―九年）たる『サラリーマン物語』、『続サラリーマン物語』、『職業婦人物語』も、それぞれ資料的に興味ぶかいが、いっそう代表的と思われるのは、青野季吉氏の『サラリーマン恐怖時代』（一九三〇年）であった。そして、ややおくれては、高橋渡『サラリーマン貧乏物語』（一九三三年）が登場し、一九三五年（昭和一〇年）にいたって、向坂逸郎氏の『知識階級論』があらわれた。これら、主としてマルクス主義者による一連の著作は、いずれもインフレーションと恐慌とが「新中間階級」におよぼした深刻な現実状況に注目し、さらにすすんでその理論的解明を目指したものである。

ところで、マルクス主義理論を「中間階級」問題の現実状況に適用する研究は、当時まだ未開拓の分野にぞくしており、どうしても現実から遊離する傾向を免かれることができなかった。一般にわが論壇の風潮は、一九二〇年代にあっては「中間階級」の「滅亡」として（たとえば山川均「中間階級滅亡論」一九二一年）、一九三〇年代に入ると、その「没落」として（たとえば大宅壮一「就職難と知識階級の高速度的没落」一九三四年）、「中間階級」のおかれた現状と将来とにつき、とかく一面的な主張に陥りがちであった。このような理論上の弱点は、第二次世界戦争後にも影響をもちこし、概してわが国における「中間階級」についてのマルクス主義的研究は、その一路衰退説というドグマに、とりつかれている感があった。

もちろん大恐慌前後に、わが国ではじめて「中間階級」問題がクローズ・アップされた当時、客観

情勢が「中間階級」一路衰退説に有力な論拠をあたえるほど、現象として深刻なものであったことは事実である。しかし、この一路衰退説は、現在「新中間階級」に平穏のムードが支配している、と主張する人々に都合のよい現象が存在するのにまどわされるのと同じ短見であった。

たとえば、一九二〇年代後半以後の大不況は、一九二七年にわが国で一四五五行を数えた銀行が、三年後には九一三行まで減少し、この間に約五〇〇行が破産や整理や合併吸収で消滅するという激しさであり、それは、サラリーマンを失業の恐怖に直面させ、かつかれらの労働条件をいちじるし悪化させた。また、資本金一〇〇〇万円以上の株式会社への入社希望者数にたいする定期採用社員数の比率も、一九二七年から年々低下し、三年後にはついに一〇〇〇人につき一五人の割合となったのである。これらは、いずれも否定できない事実であり、資本主義社会の矛盾を露呈した現象であった。しかし、この現象をただちに「中間階級」一路衰退説の論拠とするのが誤りであったことも、その後の歴史的事実が、具体的に示したところである。

なお、第二次世界戦争前、とくに一九三〇年前後（大正末期から昭和初期）の「中間階級」論が、わが国ではインテリゲンチャ論と結びついて展開されたという特長をもっていたことを、付言しておかねばならない。それは、当時すでにわが国の「新中間階級」は、近代的なサラリーマン（賃金労働者）に成長していたとはいえ、まだ今日の状態にくらべれば、一つの社会階層として未成熟であったことに起因するものと思われる。すなわち、今日の「新中間階級」の社会的基盤は、その「階級」自体の内部分化を伴う再生産を主力とするが、第二次世界戦争前は、まだ多分に「旧中間階級」が、かれらの基盤の中心であり、いわばその時代のインテリゲンチャの出身階層と、ほとんど同一であったためであろう。

ところで、いまわが国における「中間階級」論の系譜を解明しようとするなら、M・ウェーバー、K・マンハイムにその源流をもとめる必要があると思われるが、さしあたって現実にもっとも大きな理論的影響力をもっているアメリカのそれについてみても、わが国におけると同じように、ほぼ第一次世界戦争の時期までさかのぼらなければならない。

本書に収録したシュラークマンの論文「企業と給料取り」は、アメリカにおける「中間階級」論の系譜を、J・コービン、R・L・フィンニー、W・C・アボット、A・N・ホルコンブらについて、簡単に紹介している。また、同じく本書に収録したセメノフの論文「『中間階級』の神話と資本主義の現実」も、D・リースマンらの主張に言及している。これらアメリカの学者の理論は・ホワイト・カラーを労働者階級としてよりは、むしろこれに敵対する「中間階級」として位置づけるために努力を集中し、マルクス主義の階級闘争理論を自国に適用することはできず、そこでは、やがてホワイト・カラーが指導的な「階級」になるだろう、と主張するのであった。

しかし、「新中間階級」が、賃金労働者として基本的な性格をもち、しかも、その性格をますます明確にしつつあることは、よほどのドグマを固執しないかぎり、だれにも否定できない現実となってきた。したがって、右に列挙した諸家の見解とは立場を異にするC・W・ミルスは著書『ホワイト・カラー』のなかで、この現実を「客観的なプロレタリア化」としてみとめている。だが、ミルスもまた、ホワイト・カラーを「新中間階級」として特徴づけており、生産手段の所有関係ではなく、それを「職業」の視点から分析しているため、アメリカにおける従来の「中間階級」論の欠陥をまぬかれていないのであった。

三　「中間階級」論の内容

本書に収録した論文のうち、「旧中間階級」問題を主なテーマにするものは、二つだけである。そして、マルクス主義の立場から、「旧中間階級」を論ずる視点について、『エコノミー・エ・ポリティーク』誌編集部は、つぎのように述べている。すなわち、「〔旧〕中間階級の問題は、大きな政治的重要性をもっている。大資本によっておびやかされているこの階級のいろいろの部分は、その脅威にたいして反抗しており、かれらの反抗は、必然的に政治的な性格を帯びる。マルクスがはっきりと示したように、〔旧〕中間階級は、過去からうけついだ経済的諸形態を代表するものであるかぎり、いきおい反動的な立場をとりがちである。しかしながら、かれらの敵は、労働者階級の敵と同じ大資本である。だから、〔旧〕中間階級とプロレタリアートとのあいだには、恒久的な同盟の固い基礎がある」と。

まず、**ロベール・ドリーユ「中間階級論」**は、フランスにおける都市中間層の分析をおこなっている。とくに、なかでも都市中間層の中核を形成する小商人についての記述は、それが小売商業で大きな役割を占めているという点で、わが国と客観的な事情が似ているために、もっとも興味ぶかい。

しかし、マルクス主義が、都市中間層（小商人・小工業者）を、基本的な動向として、二大階級――ブルジョアジーとプロレタリアートとに分解する層と考えるだけでなく、資本主義のもとで、一方ではたえず没落させられながら、他方では絶えず新たに形成されてゆく階級としても把握していることについて、かならずしも分析が十分ではないようである。たとえば、フランス資本主義は、その発展の

途上で、前資本主義的形態たる小企業を排除するか、改造して自分に従属させるかしなければならなかったが、じっさいは後者に重点がおかれたという。しかし、この論文の筆者ドリーユのように、それを「わが国〔フランス〕の資本主義的発展の特殊な条件」とだけ解釈するなら、一面的な主張に陥らざるを得ないと思われる。

同じく都市中間層を扱ったもう一つの論文――**エリザベート・ベルンハイヤー「西ドイツの中間層・小売商業の実態」**は、資料的に重要であるが、論理的な構成は興味が少ない。たとえば、ベルンハイヤーは、商業上の競争戦で小商人の生活をおびやかしているのが、なによりもまず百貨店コンツェルンだと結論する。しかし、前記ドリーユの論文では、百貨店コンツェルンあるいは大商業トラストの運動を制約する要因が、同時に弁証法的に分析されている。すなわち、百貨店コンツェルンあるいは大商業トラストの直接の利益は、以下の四点で、ブルジョアジー全体の利益とある程度くらいちがっているのであった。第一に、小商人の既得の地位を無慈悲に奪いとるやり方は、選挙民の多数を敵にまわすから不利であること。第二に、小商人との競争に関心をもっているのは、ブルジョアジーの一部にすぎないこと。第三に、小商人が存在するため、かえって高物価の真の原因が覆いかくされ、消費者には、小商人こそ物価を吊りあげている張本人だと思いこませられること。第四に、小商人は、事実上、国家のために租税徴収者の機能を果していること。

本書に収録した他の八つの論文は、主として「新中間階級」問題をテーマにしたものである。ヴェラ・シュラークマンは、フランスのドリーユ、デュムーラン、ソビエトのセメノフのように、明確な党派的立場にたっているとは思えないが、それにもかかわらず、「新中間階級」問題に関するブルジ

ョア的な議論の特徴を、つぎのように整理していることは、ひじょうに興味ぶかい。まず第一に、ホワイト・カラーは、「資本と労働とのあいだで押しつぶされてゆく」ところの中間階級である、との主張が共通の特徴となっている。しかし、それにもかかわらず、第二に、かれら「新中間階級」は、国民のバック・ボーンであると考えられている。そこで第三に、「新中間階級」は組織されておらず組織労働者の犠牲になっているから、第四の結論として、ブルジョア学者は「なんとかしなければならない」(something should be done) とつぶやくのであった。

では、マルクス主義の立場から、「新中間階級」問題は、どのように扱われているだろうか。本書に収録した論文のうちで、具体的な事実から出発するより、古典に依拠する傾向がもっとも強いと思われる**ヴェ・エス・セメノフ**「**中間階級の神話と資本主義の現実**」は、マルクスとエンゲルスの文章を数多く引用して、かれらが資本主義社会における「新中間階級」の存在を見おとしたどころか、資本主義の発展にともなって、それが増大する傾向を指摘し、この傾向に科学的な説明をあたえたことを立証した。そして、セメノフは、「われわれが歴史的諸事実の究明にたちむかうなら、われわれは、それがマルクスとエンゲルスの諸結論を、完全に確証しているのをみるだろう」と主張している。

しかし、本書に収録した論文のうちで、「歴史的諸事実にたちむかう」ことを試みているのは、セメノフ自身でなく、まず最初に、包括的な論文である**ロベール・ドリーユ**「**新中間階級**」を挙げなければならない。これは、前記「中間階級論」の第二部として発表された。ドリーユによれば、「新中間階級」にぞくするのは、技師・技手・職長と幹部職員（国家機関・公共企業体・民間部門）および「独立」の知識人と規定されている。この規定は、「新中間階級」を、ホワイト・カラーと同義語に解する立場からみれば、一般職員層を除外している点で相違し、サラリーマンと同義語に解する立場から

みれば、第一に一般職員層を除外している点で、第二に「独立」の知識人を除外していない点で、相違がある。

〔注〕「中間階級」、「新中間層」、「ホワイト・カラー」などは、科学的な概念とは認めがたい。「サラリーマン」は、ややましな用語であり、厳密には、「事務労働者」、「販売労働者」、「教育労働者」などの概念が適切である。荒瀬豊氏によれば、このような区別だては、単なる「ことば遊び」にすぎない、といわれるが（『日本読書新聞』一九五八年二月三日号）、まったく驚くほかない。荒瀬氏は、われわれの文章をいちじるしくねじまげて引用し、われわれが「新中間層」という呼称に反対しているかのようにいわれるが、問題は科学的な概念規定にある。

しかし、ドリーユの論文は、とくに技師・技手・職長層の具体的分析と、それにもとづく問題提起が鋭い。われわれは、日本の現状を正しく認識するために、かれの方法から、多くのものを学ばなければならない、と考える。なお、**R・ウエー**、**P・レヴィ**「**現在の技師と幹部職員**」は、ドリーユの論文より以前に書かれたものであり、方法のうえで生硬な点も目立つが、資料的には貴重な文献である。

つぎに、**マリュス・ベルトゥー**「**公務員の状態**」は、本書のなかで、もっとも興味ぶかい論文の一つである。そこに展開されている個々の事実や傾向、およびひきだされた結論は、あたかも、わが国の公務員の状態について語っているのではないか、と錯覚をおこさせるような相似性が少なくない。しかし、現在わが国においては、国家公務員にもまして、地方公務員あるいはそれに準ずる公共機関勤務者の問題が重要になってきている。それは、単に地方財政が危機に瀕しているという側面だけでなく、第二次世界戦争以後、とくに「福祉国家」の理想が強調されたことと関連して、福祉事務所、農業改良事務所、保健所など地方行政の第一線にあって、予算の不足と、官僚機構の圧迫に抗しなが

らも、住民の生活に直接奉仕する業務に従う人々が、かなり増大した事実に注目しなければならない。右の事実は、公務員の在りかたに、新しい課題を提起している。ベルトゥーの論文は、残念ながら、この課題には取組んでいない。

ウジェーヌ・デュムーラン「**給料生活者**」および「**給料生活者の階級的所属**」と題する二つの論文は、論争的性格をもっており、理論上の重要な指摘をふくんでいる。デュムーランは、論文「給料生活者」において、フランスの中下層給料生活者――それはドリーユによって「新中間階級」から除外されている――の実態を分析し、かれらの階級的所属は、労働者階級にほかならない、と主張した。これにたいして、若干の読者から批判が試みられたので、『エコノミー・エ・ポリティーク』誌は、それを掲載するとともに、デュムーランの反批判「給料生活者の階級的所属」を発表した。

デュムーランは、反批判のなかで、中下層給料生活者が、労働者階級に所属することを再確認するとともに、つぎのような適切な指摘をおこなっている。――「労働者階級およびその一般的利害の基本的統一を念頭におきながらも、マルクス主義者は、この階級の内部にはさまざまな層があるということ、これらの層を考慮にいれなければならないこと、また、これらの層の意識は、しばしば現実の情勢からおくれていることを、けっして忘れたことはなかった」と。

最後に、**ヴェラ・シュラークマン**「**企業と給料取り**」および「**事務労働者の地位とイデオロギー**」について、述べておこう。この二つの論文は、シュラークマンの他の二つの論文「ホワイト・カラー組合運動と専門職業組織」および「技師のあいだでの組合運動と専門職業組織」とともに、ホワイト・カラーに関するかれの一連の労作を構成している（訳出しなかった二論文も、SCIENCE & SOCIETY, VOL. XIV, 1950 に掲載されている）

シュラークマンは、本書にもっとも数多く収録したフランスの研究者たちの論文と異り、ブルジョア的な「中間階級」論に、マルクス主義の原則を対置させる、という叙述の形式はとっていないが、かなり手きびしく自国アメリカのブルジョア理論を批判しており、しかも、その批判には、なかなか説得力があるように思われる。

論文「企業と給料取り」では、ホワイト・カラーが、客観的条件によって労働者階級の側におしやられ、伝統的なイデオロギーによって経営者の側におしやられてはいるが、しかし、ホワイト・カラーを経営者と同一視するという、これまで長いあいだ経営者が頼りにしてきた「伝説」が、アメリカでも伸通力を失いはじめていることを明らかにした。

論文「事務労働者の地位とイデオロギー」では、事務所従業員が受取っているのは「給料」であって賃金ではないとか、かれらがもっているのは「地位」であって職業ではないとか、かれらが雇われているのは「オフィス」であって生産工場ではないとか、かれらは「ビジネス」にゆくのであって労働しにゆくのではないとか、そういう側面を不当に強調するブルジョア的な考え方が、いかに誤りであるかを、具体的に示している。そして、ホワイト・カラーがおかれている現実をまざまざとみせつけるのは、ほかならぬ不可避的な恐慌であることを強調した。

四　「中間階級」論の課題

「新中間階級」の大多数は、サラリーをほとんど唯一の生活源泉としているかぎりにおいて、明らかに労働者階級の構成分子である。この点の確認は、いまジャーナリズムをにぎわしている「中間階

級」論争のなかで、第一義的に重要な意味をもっている（荒瀬豊氏のように、こうした確認は「一見もっとも」だが、たいして意味はないと主張する論者は、問題をそらしている）。

しかし、シュラークマンも書いているとおり、サラリーマンが働いている事務所の機構・組織・雰囲気は、事務労働者に、自分たちは雇主と一体だという錯覚をあたえるし、もっと本質的に、その労働者としての結合、結集および団結のありかたを検討するならば、生産労働者とのあいだに、当然ながら区別のあることも認めなければならない。

いまから約四〇年前に、ロシアのサラリーマンは、その多数が社会主義革命を流産させようとする行動に加わり、当時のかれらがもっていた階級的性格の一面を、悲劇的に示した（ジョン・リード『世界をゆるがした十日間』岩波文庫版下巻）。また、ドイツをはじめ、第一次世界戦争を契機に革命的情勢の高揚した資本主義諸国においても、「中間階級」は、多かれ少なかれ、ロシア・サラリーマンの場合と似たような態度をとったのである。

しかしその後、世界恐慌の嵐に直面し、二度目の世界戦争の荒波にもまれた資本主義諸国の「新中間階級」は、その生活条件と労働条件の悪化によって、賃金労働者としての客観的性格を明確にした。アメリカにおいてさえ、世界恐慌以後は、事務労働者と生産労働者との賃金水準のひらきが縮少し、戦時中とその直後の時期には、両者のあいだに差がなくなったばかりか、生産労働者の方が、事務労働者のそれを追いこすことにもなったのであった。

資本主義の全般的危機の深まりは、たとえば広告と月賦販売制度のいちじるしい発達をもたらし、その結果、これらの部門に従事する下層サラリーマンをいっそう増大させたし、戦争とインフレーションによる経済統制の強化は、官僚機構の内部で単純事務労働に従事する下級公務員を増大させただ

けでなく、戦時労務動員によつて「中間階級」と生産労働者との結びつきが、いやおうなしに強められた。さらに、この期間には資本家的合理化が推進され、それと密接な関連において資本の要求による学校教育の普及と拡大が進展し、「新中間階級」の特権的地位は、ゆるがざるを得なかった。

一方、ヨーロッパを中心とする「新中間階級」の人民戦線運動と反ファッショ闘争におけるきびしい経験は、第二次世界戦争後、アメリカをふくむ各国サラリーマンが大量的に労働組合へ組織された事態とならんで、とくに世界平和運動の発展を保障する一つの決定的な条件をつくりあげたのである。

わが国の「中間階級」も、戦争のために生活が徹底的に破壊され、戦争の悲惨な体験は、それを二度とくりかえしたくないという心情を、多くの人々の胸にうえつけた。そして、さらに敗戦直後にはじまる労働組合運動の高揚と、その組織的な運動によってのみ生産労働者の賃金引上げが実現してゆくありさまを、目のあたりにみたサラリーマン層の思想は、激しくゆすぶられ、大企業サラリーマンを中心とする、かれらの労働組合運動への大衆的参加がはじまった。その行動は、多くのサラリーマンの意識を変革し、かれら自身に労働者階級たる自覚をもたせたのである。

第二次世界戦争後、わが国において、サラリーマン問題に取組んでいる研究者の一人として、大河内一男氏をあげることができる。そして、大河内氏は、サラリーマン問題に関するわが学界の「支配的」な見解を代表し、体系づけているように思われる。大河内氏によれば、「職員の場合には、会社事務の担当なり経営事務の補助者としての意識の方が、労働者としての意識よりも一般的に強い。もちろん、かれらと雖も一定の労働条件において会社に雇われているという点においては、現場の労働者といささかも変りはないが、而し彼に日常与えられている仕事の内容は、あくまで労働に対する資

本の機能執行のための経営補助者である」（『銀行労働調査時報』一九五六年一〇月号）。

しかし、資本主義的発展の初期と異り、サラリーマン層の階層分化が、いちじるしくすすんでいる現実に照し合せてみるとき、その上層と下層とのすべてを十把ひとからげにして、「経営補助者」と規定するのは正しいだろうか。たしかに筆者らも、かつて大河内氏とほぼ同一の見解を支持したことがあるが（『中央公論』一九五四年六月号の論文「銀行員」）、今日では、もはやこの「理論」は訂正されなければならない、と考えている。現段階におけるサラリーマン層分化の特徴点はつぎのように規定さるべきであろう（詳しくは『中央公論』一九五七年一二月号の拙稿「日本における《中間層》問題」を参照されたい）。

(1) 管理・監督労働に従事する高級部類のサラリーマンのなかでも、下層管理者についていえば、多くの企業で進行しつつある事務の合理化、新しい労務管理方式の導入が、監督労働とその他の労働とのかなり明確な分離を可能にし、このことがかえって下層管理者自身の労働強化をもたらしている。しかも、管理者に対する管理賃が、とくに職制系列の末端において引下げられるという一般的傾向が、わが国でも現象しはじめてきた。なお、資本は管理賃を節約するため、下層管理者を増加せる代りに、単純事務労働に対するさまざまな刺激方法の採用と、事務のいっそうの合理化をはかるが、これがまた下層管理者の労働強化と、単純事務労働に従事するサラリーマンの労働組合意識の成長を促進している。

(2) 経営補助労働に従事する、いわばサラリーマンの「幹部候補生」は、まだその社会的地位は低いが、将来の「出世」を夢みているような、少数の特権的グループである。もちろん、今日では大学卒業のサラリーマンのうちでも、ごく一部分が、この席をあたえられるにすぎず、その出身階層は、概してブルジョアジーに近い。

(3)　単純事務労働に従事する下層サラリーマンは、事務の合理化・機械化にともなう大企業員の労働の筋肉労働への接近と、スピード・アップによる精神的緊張の増大、さらにオペレーターにかなりの熟練を必要とする機械の採用によって職種の固定を余儀なくされるなどの事情により、労働条件のうえで、生産労働者との区別を強調すべき根拠は、ますます少なくなっている。また合理化・機械化にともない、大企業から排除されたサラリーマンの労働条件・生活案件の悪化は、かれらを生産労働者と同列におくようになる。

こうした展望のもとでみるならば、サラリーマンのあいだに認められる「平穏のムード」は、きわめて不安定なムードであり、すでにごく近い将来にさえ、それが変質のきざしをみせる可能性は、十分にあるといえよう。すなわちその根拠は、第一に、サラリーマンの生活の「安定感」は、戦前にくらべてさえ低い生活水準のうえでの「安定感」であること。とくに、サラリーマンのなかでも、労働組合運動の発展によって、下層の賃金水準は相対的に改善されたが、いわゆる中堅層は、戦前水準に遠くおよばないのが実情である。第二に、サラリーマンの歴史的経験が示しているように、現在みられる生活安定化の傾向も、不可避的な恐慌やインフレーションなどの社会的変動により、一朝にして崩れさる危険にさらされていることである。

さいきん、われわれが発表した一連の「中間階級」論に対して、各方面からいくつかの批判がでている。これらについては、今後の研究のなかで、摂取すべきものは、摂取したいと考えるが、本稿で開説できなかつた一、二の点について、簡単に附記しておきたい。

第一に、サラリーマン層の窮乏化と、その意識の左翼化をイコールで結びつけることには賛成しが

たいとか、サラリーマン層の意識や行動の特質、傾向性や法則をいっそう明らかにすべきだ、との意見には、同意できる。われわれも、窮乏化イコール意識の左翼化というテーゼを主張してはいない。むしろ「窮乏化の解消」イコール「意識の低下」という「経済決定論」（じつは、これが筆者らにしばしば貼られるレッテルであるが）に陥っているのは、一部の俗流化した「大衆社会」論者ではなかろうか。

第二に、「存在としての中間層」と「意識としての中間層」とを区別すべきである（鶴見俊輔氏）とか、「客観的中間層」と「中間文化の実質的担い手」とを識別すべきである（加藤秀俊氏）とか、「新中間階級の階層的特性としての政治的志向や行動様式の独自性」を重視すべきである（高橋徹氏、綿貫譲治氏）とか、そうした側面から、マルクス主義にたいして提起されている疑問については、単に「新中間階級」についての研究だけでなく、それを一部に包含する労働者階級全体の各層にわたる問題として、別の機会に論じたいと考えている。この問題は、「新中間階級」だけについて、切りはなして論ずるのは誤りであると思うが、どうであろうか。

現代の中間階級

田沼肇筒

1958年2月28日発行

定価320円

株式会社 大月書店

東京都文京区本郷1の16

電話 (92) 3091,7887

振替 東京 16387

太平印刷・吉岡製本